

ひろしまレポート

第32回広島平和記念式典参加事業



松 本 市



広島^{ともしび}の平和記念公園内に設置されている「平和の灯」

「平和の灯」は、「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という趣旨で1964年8月1日に設置され、全国12宗派から寄せられた「宗教の火」と溶鉱炉などの全国の工場施設から届けられた「産業の火」が、1945年8月6日生まれの7人の広島^{ともしび}の乙女により点火されました。

目 次

○ヒロシマの願い

○レポート

今を生きる私達にできること	清水中学校2年	松 並 優 奈	… 1
平和への一歩	鎌田中学校2年	倉 田 千 義	… 2
「普通」のありがたさ	丸ノ内中学校2年	柿 澤 由 那	… 3
広島悲劇を風化させないために	旭町中学校2年	岩 波 理 咲	… 4
今、僕が伝えたいこと	松島中学校2年	深 澤 悠 貴	… 5
広島を訪れて	高綱中学校2年	小 山 舞	… 6
No more Hiroshimas	菅野中学校2年	武 本 直 樹	… 7
平和な世界を伝えるために	筑摩野中学校2年	草 間 希 泉	… 9
広島で感じたこと	山辺中学校2年	嘉 納 奏 一 朗	… 10
憎しみの心の中から平和はうまれない	開成中学校2年	浅 尾 夕 茉	… 11
消えない出来事	女鳥羽中学校2年	三 枝 悠 歌	… 12
目を背けてはいけない	明善中学校2年	堤 心	… 14
戦争なき未来へ	信明中学校2年	深 澤 愛 華	… 15
広島を訪れて	会田中学校2年	召 田 蓮 眞	… 16
戦争と核のない世界へ	梓川中学校2年	佐 原 咲 良	… 17
過去から未来へ	波田中学校2年	石 川 芽 依	… 19
平和をつなげていくために	鉢盛中学校2年	石 丸 心 愛	… 20
ヒロシマに行って	信大附属松本中学校2年	望 月 美 里	… 21
平和のため	松本秀峰中等教育学校2年	松 本 栞 里	… 23

○写真記録 …… 24

○広島平和記念式典

平和への誓い …… 26

平和宣言 …… 27

○旅の日程 …… 29

○参加者一覧 …… 30

※掲載のレポートについては、できるだけ本人の作文を尊重しています。

ヒロシマの願い

The Prayer of Hiroshima

「原爆げんぱくに会あうた」と、被爆ひばくした人たちは言います。一瞬の破壊、あまりに多くの死、大切な家族さえ救えなかった苦しみ——言葉では表現しきれない出来事に「出会って」しまったからでしょう。あの8月6日とそれに続く日々は、「思い出すことさえつらい」ことです。被爆者はその思いを乗り越えて自分の体験を語り伝え、再び核兵器を使っははいけないと、広島ひろしまの地から訴えてきました。

「ヒロシマ」は世界共通の願いと結びあい、平和を実現したいといつも願っています。

Hibakusya say simply, "I met with the A-bomb." Perhaps they use this expression because the event they "met with" defies description an instant of massive destruction, mind-numbing death and injury, and the grief of watching helplessly as family members, relatives, friends, and neighbors died in agony. They also say, "It's painful even to remember." The A-bomb witnesses have overcome that pain and are passing on their experiences of that day. They feel duty bound to tell the world why nuclear weapons must never be used again.

The continual prayer of the A-bombed City Hiroshima is to unite humankind toward our common goal, genuine and lasting world peace.

(広島平和記念資料館 収蔵品より)

今を生きる私達にできること

清水中学校2年

松並 優奈

1945年8月6日午前8時15分、広島に投下された1つの原子爆弾によって、多くの人々の尊い命、人生、未来が一瞬にして奪われました。

それから77年後の2022年8月5日、6日に私達は被爆地広島を訪れました。たくさん緑や飛び交う鳩、どこまでも広がる青い空。でも、77年前の8月6日は違いました。見渡す限りの焼け野原、黒焦げになりながら「水をくれ。水をくれ。」と水を求めてさまよう人々、赤黒い空。今の広島からは想像できません。

5日に訪れた原爆ドーム。ビルや緑に囲まれた中に佇んでいました。屋根の骨組みやコンクリートの壁だけが残っていて、その姿が原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。そこだけ77年前から時間が止まっているように感じました。

私達は被爆体験伝承者の方から、篠田恵さんの被爆体験のお話をお聞きしました。いつもの何気ない日々を過ごしていた篠田さん。しかし、B-26が投下した原子爆弾「リトルボーイ」によって、日常は一変しました。その様子はまさに地獄だったと語っていました。大火傷をして皮膚がただれて、顔が真っ黒になり、誰かも判別がつかない人。亡くなった赤ちゃんを抱きかかえる人。水を求めて消火用水槽に頭を突っ込んだまま亡くなった人。放射能を含んだ黒い雨を飲み込む人。多くの人々が一瞬で命を

奪われ、幸いにも生き残った人々も放射能による後障害で命を落としました。亡くなった人の中には、私達と同じ子供達も大勢いました。また、広島にいる家族を心配して原爆投下2週間以内に爆心地2km以内に入った人も入市被爆でガンや白血病などで命を落とし、後障害がなかった人でも差別や偏見に苦しみました。被爆体験伝承者の方は、被爆体験のお話を友達や家族に伝えて、「平和への種蒔き」をしてほしいとおっしゃっていました。

そのような多くの人々の命を奪う核兵器は、まだ世界に存在しています。なぜ、まだ核兵器が存在しているのでしょうか。核兵器を使って人々を従えさせることは、本当の強さではないと思います。

8月6日午前8時15分に原子爆弾が多くの人々の尊い命を奪ったことは紛れもない事実で、変えることはできません。ですが、未来は変えることができます。今を生きる私達にできることは、その事実をしっかりと受け止め、戦争の恐ろしさを知ること。そして、二度と同じ過ちを繰り返さないようにすることだと思います。そのためにも広島で学んだことを周りの友達や家族など、より多くの人々に伝え、「平和への種蒔き」をしていきたいです。それが、核兵器廃絶そして世界恒久平和への第一歩になると思います。

核兵器がなくなり、誰もが戦争に怯えることなく、平和な世界になることを願って。

平和への一歩

鎌田中学校2年

倉田 千義

1945年。私の祖父が生まれた年です。当時30代だった曾祖母は、東京大空襲にあい、生まれたばかりの祖父を連れて親せきを頼って長野県に疎開してきたそうです。

私の知っている祖父は孫たちにくだらないいたずらを仕掛けては喜び、わがままを言っは祖母を困らせる子供のような人で、そんな祖父と遊ぶのが私は大好きでした。おばあちゃん子だった私の母は、幼いころから曾祖母に戦争の体験を聞いて育ったそうです。戦時中はもちろん、戦後もしばらくは食べることも大変だったそうで、芋のつるやすいとんでおなかを満たし、曾祖母も祖父も大変苦労したと母に聞きましたが、そんな苦労した過去を感じさせない、私にとっては友達のような人でした。

今回、平和についての勉強に参加させていただくことが決まった6月のはじめまで「戦争」と聞いてもどこか他人事で、正直ピンときていませんでした。

自分なりに戦争のことについて調べた後、原子爆弾の被爆地広島を訪れ、被爆体験者の話を聞き、平和記念資料館を見学したとき、今まで戦争について、何も考えずに毎日を生きていた自分が、どれだけ恵まれていたのかと痛感しました。毎日当たり前前に学校に通い、おいしいご飯をおなかいっぱい食べることができ、清潔な布団で安心して眠ることができる環境。日々の生活でのあたりまえは戦時中はあたりまえではなかったのです。当時は、私とそう歳が変わらない少年たちが徴兵され、少女たちは後方を支援する労働力として酷使されていました。働きに行かされた子供たちの家族もつらい思いをしたはずです。「国のために戦え。」なんて本心から言える親などいるはずありません。で

すが、当時は自由もなく、いつ死ぬかも分からず、ただ「国のため」に生きた時代でした。日本人だけではなく、他の国にも同じように、わけもわからずに、「国のため」に生きた人々が多くいたのではないかと思います。

終戦から77年。いまだ、世界では戦争が続いており、差別・偏見は完全には無くなってはいません。それでも、お互いの国のすばらしいものを認め合い、国境を越えて交流する人も増えてきました。

戦後まもない時代を生きた祖父も昨年亡くなりました。今の私のような自由はなかったと思いますが、わんぱく坊主を絵にかいたような祖父です。がまんを強いられるような生活の中に楽しみを見つけ、いたずらに精を出していたのでしょう。

中学2年生の私には、なにをもって「平和」というのか分かりません。日本で暮らす、ちっぽけな中学生の考える「平和」は他の誰かとは違う形の「平和」なのかもしれません。しかし、ひとつだけ分かることは、戦争の先に「平和」を見出すことは無い、という事です。それぞれの国の主義主張のためにそれぞれの国民が巻きこまれる戦争。今でも戦争が続いているという事は、戦争の先に平和のようなものを見出している人がいる、ということです。

人にはそれぞれ気持ちがあり、誰もが誰かの大切な人で国のために捨ててもいい命なんてないのです。戦争をしている人達には、戦争のおろかさに一刻も早く気づき、命を大切にしてほしいです。そして、私自身も自分の命も他人の命や気持ちを大切にできる人間になりたいです。それが私の考える「平和への一歩」です。

「普通」のありがたさ

丸ノ内中学校2年

柿澤 由那

現在、私たちは戦争はもう昔のこととして考える人が多くいます。しかし今も尚日本で起きていなくとも世界で起こっている、あるいは戦争の苦しさを知っている人は多くいます。その中で今、私たちは何ができるのでしょうか。

昭和20年8月6日午前8時15分、広島に1発の原子爆弾が投下され、多くの人の命を奪いました。半径2.5km圏内が全壊になり約14万人の方が亡くなり身元不明の方も多くいました。私はこのときに被爆した篠田さんの体験談をお聞きしました。まず、広島になぜ原爆が落とされることになったのか私はずっと疑問に思っていました。その理由は、当時広島は軍が主要でとてもにぎわっている地でした。有名な原爆ドーム、当時、産業奨励館では日本の最先端を紹介しているところでした。今あるバームクーヘンも昔ここで紹介され有名になりました。そんな、人が多く発展していた広島に原爆が落とされることになったのです。そして一瞬にして多くの人の幸せを奪いました。爆弾が投下されやけどを負ったり、病気にかかったりとたくさんの方が苦しみ悲しんだそうです。今の私たちには、想像もつかない程残酷で、どうしようもできないことが77年前に起こったのです。投下当時2歳だった女の子がいたそうです。そのときは無傷で何も目立って病気は無かったそうです。しかし10年後、12歳のときに白血病と診断されたそうです。被爆して、数年経ってから病気が発覚したのです。それは、放射線による被害だったのです。その後、その子は入院し千羽づるを折ったそうです。ことわざに亀は万年、つるは千年というのがありつるは長寿の象徴だったのです。しかし、つるが643羽のときにその子は亡くなってしま

ったそうです。広島にはつるがかざられているところがあります。それは、女の子の友達がその子を思って造られたそうです。この子のように何十年経っても苦しむ方はたくさんいたそうです。今はもう原爆による放射線での影響はないですが、昔浴びた放射線での被害はあったそうです。それほど恐ろしいものだったので。被害を受けた後、負傷者の手当てなどでは油を使ったりだいこんやじゃがいもをすって手当てをしていたそうです。負傷した人、全焼をまぬがれた人たちが皆言いすがって来たそうです。食べ物、飲み物をくれなどを言ったり虚ろな目で多くの人が見てきたそうです。食べ物は配給制でけて多くは食べられなかったそうです。動ける人は、建物疎開作業が多く疲れて動けないことも沢山あったそうです。そんな中で、食べ物がおいしかったりすることが嬉しかったそうです。今私たちが、自由に寝られたり、「普通」にご飯を食べられることはとても幸せでありがたいことなんだと思いました。

私は今回、この広島平和学習で多くのことを学びました。人はいつどこで、何が起こるか分かりません。しかし、戦争や人を苦しめることがあってはならないのは昔も今もこれからもあってはいけません。そこで私たちができることは少ないかもしれませんが、です戦争は虚しく命は尊いということを伝えていくことはできます。なので私たちは今を生きる人としてどんなことがあろうと人を苦しめてはいけなく、昔のあやまちをくり返さないと心に決めました。これから、このようなことが起きないため、被爆者の思いを伝えていくと、もう人を苦しめないと決めました。

広島を風化させないために

旭町中学校2年

岩波 理咲

私は、原子爆弾が世界で初めて投下された日から77年経った今年、広島を訪れました。広島には、目を背けたくなるような過去の資料がたくさんありました。私もはじめは、中々受け入れることが出来なかったのですが、段々と、「これは知っておくべき、知らなくてはならないことなのだ」と思うようになっていきました。今回、私が広島に行って、学んだことをお話させていただきます。

まず、原子爆弾が投下された当時の様子についてです。8月6日、出されていた空襲警戒警報が午前7時半頃に解除され、広島の人々は安心していました。建物疎開の作業に取りかかる人、学校の校庭に集まる小学生…。いつもの通りの生活がまた始まったかのように思われました。しかしその時、青空に突然姿を表したB29に多くの市民は気が付きませんでした。

そして、午前8時15分。信じられないほどの熱と爆風、轟音が広島を襲いました。人々は、全く状況が分からないまま、ただただ逃げました。あまりの熱さに、川に飛び込む人も多くいたそうです。即死してしまった方もいて、道にはたくさんの死体があったそうです。

次は、原子爆弾が投下された後の様子についてです。広島を風化させないために、怖くても、あの日何があったのか知ろうとする努力を、これからも続けていこうと思います。

が、まだ残っていた放射性物質の影響を受けてしまったり、大切な人を失ったショックで食欲がなくなってしまったりして、亡くなってしまうことも多くあったそうです。

そして、77年経った今でも、放射性物質の影響を受けている人はたくさんいます。被爆二世や三世への原子爆弾の影響についてまだ分かっていないことも多くあり、それが差別や偏見に繋がってしまうということもあるそうです。原子爆弾は、身体的にも心理的にも苦痛を与えてしまうものなのだと分かりました。

私は今回、胸が締め付けられるような思いで、平和について学びました。もう二度と、同じようなことを繰り返してはならない、とも思いました。

一方で、核開発を行ったり、核兵器の使用をほめかしたりする国もあります。必死で核兵器の危険性を伝えて下さっている方々がいるのにも関わらず、こういった国があるのは非常に残念なことだと思います。

原子爆弾によって引き起こされた悲劇を風化させないために、怖くても、あの日何があったのか知ろうとする努力を、これからも続けていこうと思います。

また、私自身が言動や行動に気を付け、世界の平和構築の一助となるよう努めていきたいです。

今、僕が伝えたいこと

松島中学校2年

深澤 悠貴

僕は、小学5年生の時に「ヒロシマ消えた家族」という本を読みました。その本には幸せに暮らしていた家族が原爆によってバラバラになり一家が全滅した写真の記録と平和への願いが書かれていました。僕は広島で何が起きたか詳しく知りたいと思い、広島平和記念式典参加事業に参加しました。

8月5日、僕は初めて広島を訪れ平和学習をしました。バスで広島平和公園に向かう車窓から見た原爆ドームはまわりの景色とは違い異様な姿でたたずんでいました。77年前の8月6日午前8時15分、ドームのすぐ近くにある島病院の上空600mで原子爆弾が炸裂しました。原爆ドームは鉄骨と建物の一部だけが残ったようです。僕は「ヒロシマ消えた家族」の本の写真を思い出し、とても怖くなりました。

あの日、立ち上がるきのこ雲の下でなにがあったのか広島平和記念資料館で学びました。人影が焼きついた石、放射線で髪の毛が抜けた人の写真、肌に紫色の斑点が出来た人の写真、焼け野原に頭蓋骨がたくさん並べられていてそれに手を合わせている女性の写真、ポロポロになった服、被爆者の遺品など見て、被爆の惨状が分かりました。展示されていたもの一つひとつが怖く感じ、原子爆弾の恐ろしさ、残酷さを感じました。

伝承者の方からは、「語り部」として被爆体験を語りつづける被爆者篠田恵さんの話を聞きました。当時、篠田さんは広島女子商業学校の2年生でした。その日の朝は家で弟と過ごし

ていました。そして原子爆弾によって家にも炎が襲いました。焼け野原では、いくつもの丸焼けになった遺体、黄色い臓物が飛び出した馬の死体、弟と同じくらいの小さな子が母親らしき遺体のそばでじっと座っている姿を見ました。電車の中には座ったまま亡くなっている人、黒こげになった人、水に頭を突っ込んだまま亡くなっている人がたくさんいたそうです。僕は記念資料館で見た悲惨な写真を思い出し、恐ろしくなりました。伝承者の方は、「家族・友人に今日のことを話してほしい」とおっしゃっていました。

広島での学習を通して、見て、聞いて、原子爆弾が落とされたことが本当に起きたことだったと思い知りました。改めて核兵器、戦争の恐ろしさと、平和の尊さを実感しました。77年が経った今でも世界では絶えず争いが起きています。ロシアのウクライナ侵攻、タリバンのアフガニスタン制圧など多くの国でまだ紛争があります。今も戦争の犠牲のなかで苦しみ、生きている人がいます。一刻も早く戦争が終わり、核兵器のない、争いごとのない世界になり、平和を守りたいと強く思いました。今回学習したことを中学校のみんなに伝え、戦争のこと、平和の尊さを考えてもらいたいです。学校中がお互いを認め、許し合える仲間でありたいと思います。

僕は、今生きていることに感謝し、さらに自分は何が出来るかを考えていきたいです。

広島を訪れて

高綱中学校2年

小山 舞

私は、8月5日、6日に松本市の代表として初めて広島県に行きました。私たちは、平和記念式典には参加することができませんでしたが、広島平和記念資料館や被爆者の方のお話を聞くことができました。

広島平和記念資料館では、被爆者の方の遺品や被爆の惨状を示す写真がたくさん展示されていました。7,000度の熱により、服の模様が肌焼き付いてしまっていたり、火傷の跡が盛り上がるケロイドになった写真がありました。他にも放射線により、脱毛したり、紫の斑点が出てしまったりしたそうです。紫の斑点は、「死の斑点」とも言うそうです。また、爆発後には、放射性を含んだチリやススなどが地上から巻き上げられ、黒煙となり空気中の水滴と混じり黒い雨となって降りました。人々はのどが渇いてこの黒い雨を飲み、多くの方は3ヶ月にもわたり下痢をしたそうです。原爆ドームを見て原爆の人体に及ぼす影響がこんなにも恐ろしく、悲惨なものだと感じました。このことをもっとみんなに知ってもらいたいです。

被爆者の方のお話では、当時の広島の子どものお話を聞きました。私たちは、当たり前のように学校に行き、勉強をしたり、お友達と遊んだりすることができます。それは、周りの方たちがたくさん力をかしてくれているからです。でも、被爆した方々は、学校に行っても、

後遺症で差別を受け学校に行きづらかったそうです。なので、日々学校に行き勉強をしたり、お友達と遊ぶことに感謝したいと思います。

今回の体験を通して私は、平和とは何かや、戦争の悲惨さを学びました。「憎しみの中からは平和は生まれません」を常に意識し、一日一日を大切に生活していきたいです。また、何か嫌なことがあったら暴力やケンカで解決しないで、話し合いで解決していけたらいいです。これは、「平和への一歩」だと思います。そして、「平和」を言葉だけでなく、形にしていけたら良いと思います。

No more Hiroshimas

菅野中学校2年

武本 直樹

1945年8月6日8時15分、人類史上初の原子爆弾「リトル・ボーイ」が投下され、炸裂しました。広島は一瞬にして跡形もなく吹き飛ばされ、多くの罪もなき人々の命を奪い去りました。そして、今もなお放射線の影響により後遺症に苦しんでいる人々も大勢います。

僕は、8月5日、8月6日に菅野中学校の代表として広島を訪問させていただきました。平和記念資料館の見学や被爆体験伝承者の講話などを通して、原爆について知り、戦争の悲惨さや、平和のありがたさについて改めて考えさせられました。平和記念資料館には、被爆した人の写真や、その人たちが身に着けていたもの、愛用していたものなどがありました。僕は、ある一つの写真が強く印象に残りました。それは、人が横たわっているものですが、その人は僕たちと同じ容姿をしていません。原爆のせいで全身が腫れ上がり、目と口は凹んでいて、その写真が白黒写真だったせいか、まるで現代で言うホラー映画のように恐ろしく、怖い感覚を覚えました。他にも、壊れてしまった三輪車や、焼け焦げた弁当、懐中時計などがありました。その一つ一つに様々な思い出があったはずなのに、たった一つの原子爆弾が全てを破壊してしまいました。「悲しい」ただその感情だけが頭の中に浮かんできました。そして、見たく

も体感したくもないことを味わった唯一の被爆国として核廃絶を訴えていかなくてはいけないのだと改めて強く感じました。

資料館の見学をした後、被爆者である篠田恵さんの伝承を行っている方の講話をお聞きしました。その講話の中の「自分が作業に行かなくてよかった」という言葉が一番心に残りました。当時、恵さんは13才で、朝から建物疎開作業に行く予定でした。でも、その日は寝坊をして行かれなかったそうです。8時15分、原爆投下。彼女はその後、地獄のような光景を目の当たりにすることになります。爆風により木造の建物が倒壊し、圧死した人。地表3,000度から4,000度もの熱風により手から皮膚が垂れ下がった人。頭がぐちゃぐちゃになった人などがいたそうです。そこには、作業に行っていた友達もいました。全身にやけどを負い、皮膚が黒く焼け焦げていました。それに対して、無傷の自分。「作業に行かなくてよかった」という気持ちとは裏腹に「生き残って申し訳ない」という後ろめたい気持ちでいっぱいになったそうです。そして、その後も1平方メートルあたり11トンほど降り積もった放射線により生き残った人々の中にも皮膚症や、白血病、がんなどといった後遺症に悩まされる人たちが出てきました。人々は被爆者であるという

差別や偏見を受け、精神的にも追い詰められていきました。原爆は本当にむなしいものです。

この平和学習を通して、戦争に対する考え方をもっと重くとらえなければいけないと感じました。そして、原爆がもたらす苦しみや悲しみを決して忘れてはならないと心に刻みました。しかし、伝承者の方が教えてくださったように憎しみの心中からは平和は生まれません。互いに手を取り合うからこそ平和につながります。僕たちは、原爆が存在するという意味である「平和の灯」を消さなければいけません。それには、今回貴重な経験をさせていただいた自分にできること、それは隣にいる友達に、多くの人に戦争・原爆の悲惨さを伝えていくことです。今起きている戦争に正義はどこにもありません。全ての人々が戦争・原爆の悲惨さを現実のものとして捉え、日々の生活を送れていることに感謝し、平和について考えることが大切です。

“No more Hiroshimas” 二度と原爆が使用されることがなく、廃絶に向かうこと。そして、77年前のきれいで澄んだ青空が未来永遠に引き継がれていくことを願います。僕は決して今回体験してきたことを忘れません。

平和な世界を伝えるために

筑摩野中学校2年

草間 希泉

77年前の8月6日8時15分何が起きたか知っていますか。「リトル・ボーイ」そう名付けられた一発の原子爆弾で広島は一瞬のうちに焼け野原になり、多くの人々の命と、生き残った人々の未来をも奪いました。

私は中学校の代表として広島に訪問しました。広島駅を出ると長野県とは違った空気感でした。広島に着いて最初に行った平和記念資料館では、被爆者の遺品や写真などいろいろな物がありました。その中で私は、ある一枚の写真が頭に残っています。

それは東館から本館へ行くための道に一人の少女の写真が飾られています。少女は右腕にひどい火傷を負っていました。

みなさんは、原子爆弾が爆発した時の地表面の温度を知っていますか。爆発0.2秒後から3秒の間、爆心地周辺の地表面の温度は、3,000～4,000度にも達します。鉄が溶ける温度が1,538度です。また爆心地から600m以内の屋根瓦は、表面が溶けて、ぶつぶつの泡状になりました。いかに爆発時の熱が高く爆心地周辺にいた人たちがどれ程大怪我をして、怖い思いをしたか。原子爆弾の強さ、残酷さを写真や資料で学びました。

次に、私たちは、被爆伝承者の坂本敦子さんから被爆者の篠田恵さんのお話を聞きました。当時広島女子商業学校の2年生だった篠田さ

んは、8月6日の朝建物疎開に出る予定でした。ですが篠田さんは、寝坊をしたため作業を休み、弟はるきくんのために折り紙を折っていました。はるきくんはお母さんとしゃべっていたおばあちゃんに、自分が食べている豆を差し出した瞬間、ふわっと部屋中に炎が入ってきました。篠田さんは、爆心地から2.8kmで被爆されました。2か月後、弟のはるきくんは、どんどん痩せ亡くなってしまいました。私は、話をきく中で、「憎しみの心の中から平和は生まれない」、「今日の話をしていろんな人に言ってほしいそれが平和の種まきになる」という言葉が頭に残っています。

戦争は家も、親しい友人も、家族も、命も、全てを奪っていきます。今ウクライナで戦っている人、地下シェルターで誰かの帰りを待っている人などいろんな人がいます。でもその全員が大切な人がいて、帰りたい家があって、失いたくないものだって、夢だってある。それは全員一緒なのです。私たちは、今平和でしょうか。私はそうは思いません。核兵器がある限りどこかの顔も知らない人たちが怯えながら過ごす、それが本当の平和なのでしょうか。戦争がどれ程残酷だったのか、今回の経験を通して、みんなに伝えていきたいです。

広島で感じたこと

山辺中学校2年

嘉納 奏一朗

鉄骨がむき出しになり、今にも崩れ落ちそうなおどろおどろしさを感じさせる建造物。8月5日、僕は原爆ドームを見つめていた。それはまるで原爆を起こした戦争を呪っているように見えた。

写真を撮る時は苦痛であった。どんな表情でいけばいいかわからないからである。それ程、原爆ドームは生々しい戦争の成れの果てを僕の目に焼きつけた。しかし、町は活気づいていた。原爆ドームとはうって変わってとてもいきいきしていた。でも、その町を作り上げるために、生きるために、戦時下何があったのかを知ることとなった。

広島平和記念資料館は大勢の人で混雑していた。外国人だってたくさんいた。平和を願う心は国境を軽々と飛び越える。世界中にも戦争で苦しむ人は大勢いる。しかし、だからこそ戦争を起こす人々は少なからずいるのだと悟った。資料館に展示されていた物は全ておぞましいものばかりだった。写真などは白黒なのがさらに戦争を想像させる。本当に恐ろしかったのは中学生の学生服を見た時だった。自分と同じくらいの子も大勢亡くなっているのだと生で感じた。残酷すぎる。さらに放射線というどうしようもない障害により倒れていく人々。何ということか僕がその場にいたときの想像をしてしまう。多分僕なら自ら命を絶ってしまう。なのに、写真の中の人々は皆生きようと必死に

なって努力をしていた。それを見て僕は自分の選択を恥じ入った。生物の本質は生きることなのだ。人間の存在意義はそこにいることなのだ、と。だからこそ、核兵器は人間が持つてはいけないものだと思った。当時は生きるために必要だと思い、核兵器を作ったのだろう。しかし、それは人類を、いや、地球上の生物を滅ぼす、ただの破壊兵器だった訳である。ただの、だ。そんな壊すだけで後片付けもできないままごとの兵器など、何の価値もないと思うのだが。ただ、そのただの破壊兵器一つだけで大勢の人の幸せが奪われた事は許しがたい事実である。そもそもなぜ核兵器などを作ってしまったのか。世界を壊すと分かりきったものを、なぜ捨ててしまわないのか。ぼくには全く分からない。

今のままだと本当に生意気な中学生なので少し補足しよう。僕は広島に行く前、不安があった。僕が平和について語っていいのか、ということだ。原爆を体験したことなんて絶対ないし、つらい気持ちを分かっているつもりで核兵器はいけません、なんて言っているのか。でも、話をしてくれた被爆伝承者の坂本さんは、広島で感じたことを大勢の人に伝えて下さい、とおっしゃいました。平和のためには、何か行動を起こした方がいいと、そして、それは現地の人々が望むことなのだと知りました。それが2日間で一番大きな収穫です。

憎しみの心の中から平和はうまれない

開成中学校2年

浅尾 夕茉

広島へ行ってきました。

初めて訪れた広島は高い建物が沢山あり、沢山の人々でにぎわっているところでした。小学校の教科書で見た写真とはあまりにも違って、本当にここに原爆が落とされたのかな？と思ったのが第一印象でした。

広島市内にある原爆ドームへ行きました。原爆ドームは、原子爆弾の威力や恐ろしさが一気に伝わってきて、第一印象とは違う建物の姿に異空間を感じました。

平和記念資料館の見学では、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料が展示してあり、あの日立ち上るきのこ雲の下で何が起こったのか恐ろしい程伝わってきました。被爆前後の広島市街地の映像があり原爆投下前と後の広島の変化に「ぞっ」としました。3m程の大きさの原子爆弾が、一瞬にして当たり前の日常の何もかもを奪い恐ろしい光景へと変えてしまった事がとても恐怖でした。

今までは戦争に対してどこか他人事ではか思っていませんでしたが、実際に写真や展示、その場所のありのままの姿や建物にふれる事で、物にあふれたぜいたくできれいな環境が当たり前になっていたことに気づき、当たり前の日常に「ほっ」とする自分がいました。

被爆体験伝承講話では、今まで知らなかった事を勉強出来ました。広島が、日清戦争で重要土地になったこと、日本軍の拠点や兵器を作る

工場があった事や連合軍の捕虜収容所がないと思われていた事、都市の大きさや地形が原子爆弾の破壊能力を実験するのに適しており、同時に原爆投下後の破壊効果を確認しやすかった事などの理由で広島に爆弾が投下されてしまったようです。原子爆弾は投下43秒後、高度600mの上空で核爆発し、爆心地から2km以内の地域は完全に焼きつくされその周辺部も爆風によって家屋の大半が倒壊しました。投下数秒で、一瞬にして沢山の物や沢山の命を失い、広島市は焼け野原となってしまいました。77年たった今でも、続く後遺症に苦しめられている人が沢山います。その人達にとって戦争は今も終わりを迎えていません。

今回広島へ行き、原子爆弾の恐ろしさや平和のありがたさについて多くを学び感じとる事ができました。77年たった今、原爆を体験した方の平均年れいが84歳になっています。この悲惨で苦しい想いをした事実を知っている人が減ってしまうので、取り返しのつかない事が二度と起きてしまわない様に今回広島で見た事、聞いた事、感じとれた想いを私も沢山の人の人に伝えていけたらいいなと思いました。被爆体験伝承講話で聞いた、「憎しみの心の中から平和はうまれない」という事を忘れずこの原爆を最後に、今後世界が平和になって欲しいと心から思います。

消えない出来事

女鳥羽中学校2年
三枝 悠歌

私は、8月5日、6日の広島での平和学習で戦争の恐怖、どれだけの人が苦しんだのか知りました。

平和記念資料館には、被災した子が実際に着ていた服や原爆が落ちて思ったことが展示されていました。展示されていた中から印象に残ったものをいくつかあげます。1つ目は原爆が落ちた後の写真です。被爆し、肌がただれてしまった子。肌が岩のごつごつした人。別の写真では右目の部分の肌がだらんと床につきそうなくらいただれてしまい右目が見えなくなってしまう子。ガリガリになって骨が曲がってはいけな方向に曲がっている子の写真などがありました。カメラを見る目はとても恨めしそうで苦しそうで目をそらしたくなるほどでした。2つ目は、被爆した人々の言葉の展示です。『目を開けて、目を開けて』とすでに息絶えている子供を抱き、半狂乱で叫びながら子供の名前を呼ぶ母親。ある子は原爆の煙を見て『真っ赤、いや違う黒味のかかった朱色そんな気もする』と言っていました。戦争の原爆一つで一瞬にして家族を失う者。住む家が消えて無情者になった者。いろいろな言葉がありました。この資料館は広島が最初の被爆地になってもうこのようなことが起きないでほしいという思いで存在しています。

8月6日の平和記念式典についてです。今年

私たちは平和公園で参加することは無理でしたがホテルの一室でリモート参加しました。去年までに約32万9千人の人が原爆の影響で亡くなっていました。そして今年、新たに4千9百人の発表があり計33万4千人が命を落としていたことが分かりました。今年はロシア、ウクライナが戦争している中だったので人々の核への危機を強く感じました。そして式の中原爆で亡くなった御霊に黙祈を捧げました。77年前のこの時間、ここで多くの命が一瞬で消え去ったのだと思うと驚きと悲しみを感じました。そして黙祈の一分間、「ここで被爆した人は凄く苦しかったのだろう。安らかに眠ってください」、と精いっぱい祈りました。

伝承者の坂本敦子さんが被爆者の篠田恵さんから聞いたお話を聞かせてくれました。篠田恵さんは世良家の5女として生まれ兄や姉、弟父と母と暮らしていました。そんな幸せな家庭を壊したのは8月6日に落ちたリトルボーイでした。縦3m横0.7m重さ4tの小さな爆弾。一瞬で大きな火球となり摂氏数百万度もの温度が数十秒間以上光り続けました。近くにいる人は即死か数日後に死んでしまい運良く生き残った人でも苦しめられたようです。原因は放射線です。リトルボーイは普通の爆弾ではありえないほどの放射線を残しました。放射線の影響で熱や嘔吐などの症状が起きました。恵

さんは弟と母と一緒にいるとき火の手が上がりました。『もうここには住んでられない』そう思った恵さんの母は5 km離れた所にある親戚の家でお世話になることを決めたそうです。ですがけがで動けない母と弟のために先に親戚の家に行き手押し車を借りることにしたそうです。無事に手押し車を借りることができた恵さんは帰り道で次々と恐ろしいものを見ます。人が来た、と思ったら頭はぐちゃぐちゃで服は着ているとは言えない悲惨な状態の人や畑で傷にキュウリやジャガイモを擦りあてている人。恵さんは怖くなってそっちの方を見ないように進んだそうです。恵さんは戦後も大変なことが色々あったようですが、恩師の沼田鈴子さんと再会したことで、その後の人生を大きく変えるきっかけとなりました。沼田さんは原爆によって一時左足に大けがを負ってしまい、死んでしまった方がましと考えた時期があったそうです。ですが近くのおばさんに『今多くの人が亡くなっていますどうかあなたの命だけは…』といわれ怪我した左足の切断を決行したそうです。沼田さんは『憎しみの心からは平和は生まれない』と言っていたそうです。被爆した人のお話が直接聞けなくなっている中、戦争の悲惨さや無情さを忘れないことや語り継いで平和の大切さを感じていくことが大事だと思いました。

私はこの平和学習を通して平和を守るために戦争に対してなぜそのようなことをするのか自分たちで知ろうとする姿勢が大事だと思

います。その行動が輪となって広がっていくといいと思うので私から少しずつその輪を広げていきたいです。

目を背けてはいけない

明善中学校2年

堤 心

私は8月5日6日に初めて広島に行きました。今から77年前、1945年、8月6日、午前8時15分に広島に原子爆弾が投下されました。この日を境に広島は一変しました。

8月5日に私たちは広島平和記念資料館に訪れました。広島平和記念資料館の中に入るとたくさんの遺品、原子爆弾の残酷さをそのまま描いた絵や、被爆者の魂の叫びが目飛び込んできました。幸せに暮らしていた人々が突然たった一つの爆弾で35万人以上の人々が爆風、熱線、放射能により亡くなりました。それでも助かった人々もいます、その助かった人々は、身体にいろいろな障害を抱えながらも生きてきました。熱線で火傷を負い、そのあと皮膚が盛り上がるケロイドになったり、熱線により、服や着物の柄が皮膚に焼き付いた人もいました。熱線だけではなく、放射線により発病したり、亡くなる人もいました。また、爆発後、放射性物質を含んだちりやススなどが巻き上げられ黒煙となり、空気中の水滴となり、黒い雨となって降りました。今でも放射線の影響で苦しんでいる方々も多くいることに心が痛みました。平和記念式典を見学していたら、何人もの人々が原子爆弾の展示品を見て涙を流していました。私は、戦争の残酷さ、恐ろしさ、愚かさを学び、それを後世に伝える義務があります。戦争は人類史上最悪の出来事で、「辛くても目を背けてはいけない。」と心から感じました。

みなさんは「この世界の片隅に」という映画を見たことがありますか？私は一度広島に行く前に見ました。映画を見た後に「痛そう。かわいそう。一つの爆弾で本当にこのようになるのかな」と思いました。そして、広島に行ったあともう一度映画を見直してみました。それはたった一つの爆弾で、たくさんの幸せな家庭を一瞬で地獄に変える映画でした。私は目を背けたくなくて何度か見るのをやめようと思いました。しかし、広島平和記念資料館の中にあった一文を思い出しました。「これはすべて人間が生み出したものです、どうか、辛くても目をそらさないでください。」この言葉を思い出して映画を最後まで見ました。辛くても一生懸命生きようとしているシーンを見て私は胸を打たれました、原子爆弾は人間の命も一瞬で奪っていきます。私は、戦争は絶対に嫌です。そして、世界史上最悪な出来事は、人間が始めた以上、人間が終わらせなくてははいけないと思いました。77年前のあの日が、被爆の最初で最後になることを願いました。この2日間という時間は私にとってとても貴重な経験になりました。広島では人の命の尊さ、戦争、原子爆弾の恐ろしさ、残酷さ、多くの人々の苦しみを目の当たりにしました。もう二度と戦争を繰り返さないために、自分たちができることを考え、実行していきたいです。今回はこのような貴重な体験をさせていただき有難うございました。

戦争なき未来へ

信明中学校2年

深澤 愛華

なぜ戦争が始まるのか、みなさんは考えたことがありますか？

私は、この広島平和記念式典参加事業で、核兵器の恐ろしさ、戦争の愚かさを学びました。

被爆体験伝承講話にて、伝承者の坂本さんのお話を聞きました。現在から77年前、8月6日、8時15分、私たちが暮らす日本の「広島」に、世界最初の原子爆弾が投下されました。一瞬にして町は破壊され、多くの人が何が起きているのか分からないまま、命を奪われました。原爆が投下された直後は、地表の温度は4,000度に達し、中国山地を吹き返す爆風が吹きました。放射線によって人間の細胞は破壊され、見渡す限りが焼け野原となりました。大火傷をした人の悲鳴のような叫び声。子と呼ぶ親、親と呼ぶ子。衣服は焼けただれて裸同然の男女の区別さえもつかない人々。髪の毛も無く、目玉は飛び出し、唇も耳も引きちぎられたような人。体中の皮膚が垂れ下がり、全身血まみれの人、人。被爆者の方達は想像も出来ない程の苦しみを味わいました。こんな悲惨な状況の中、2,000人余りの人々が路上生活をし、餓死していく人達もいる中、それでも生きようとした人は、石を舐めたり、新聞紙をも口にしたそうです。

平和記念資料館では、目を背けたくなくなってしまふ写真や物がありました。皮膚がただれてしまっている写真、高熱でゆがんでしまった三輪車、炭と化したお米が入ったお弁当箱、全ての

展示物が原爆の恐ろしさを語っていました。

私たちは当たり前のように家があり、そこで一緒に暮らす家族があります。学校で学ぶことができ、仲の良い友達がいいて、おいしいご飯を毎日お腹いっぱい食べられて、ゆっくりと寝られて、また朝を迎えることができます。しかし、これは決して当たり前ではありません。「当たり前」に生きていること自体がとてもありがたいものなのです。私は、こうして今も生きていられることに感謝を毎日したいです。ところが、現在でも、広島に投下されたものとは比べものにならない破壊力をもった核弾頭が世界に約13,000発あります。このうち一つでも使用されてはいけません。日本は、原爆が投下された唯一の国です。それなのに、核兵器禁止条約に参加していません。日本はもっと世界に原爆の恐ろしさを発信していかなければいけません。この令和の時代でも戦争が起こっています。

大切なものを奪われた被爆者の魂の叫びを受けとめ、次の世代や世界中の人達に伝え続け、「悲惨な過去」は「悲惨な過去」のまま終わらせないために私が今できることは、周りの人にこのことを伝えることだと思います。戦争が起こる原因は、自分が一番だという気持ちだと思います。相手を尊重し、想いやる気持ちが必要です。一人一人の人間の力は小さく、弱くても、世界中が平和を望むことで戦争はなくなると私は信じています。

広島を訪れて

会田中学校2年

召田 蓮真

『戦争は絶対にやってはいけない』

今回広島を訪れて、色々なものやことを見て一番感じたことです。

1日目の原爆資料館では、原爆の威力や、それによる被害、そして影響など、色々な写真やものを見て衝撃を受けました。黒焦げのお弁当やボロボロの洋服など、悲しい気持ちになりました。原爆ドームも、もともとの建物を見て、今の姿と全く違ったので驚きました。原爆の恐ろしさを知りました。

その後聞いた被爆体験伝承講話では、篠田恵さんという方が体験したお話を聞きました。篠田さんは当時、自分たちと同じ中学生だったそうで、男性は戦場にかり出され、中学生は工場などで労働させられていたそうです。そして8月6日当日、篠田さんは疲れきっていて、起きた時には仕事の時間を過ぎていたので、母と2歳の弟と家にいたそうです。すると、突然家の中に炎が入ってきたそうです。まさにこの時広島に原爆が落とされたのです。お母さんや弟はやけどを負い、外は色々なものが燃え、パニックになっていたそうです。篠田さんの家も住める状態ではなく、お婆さんの家へ行くことに。逃げる途中、たくさんの方が亡くなっているのを何度も見かけたそうです。頭はゆがみ、顔はぐしゃぐしゃ、皮ふはただれている、そんな人達がたくさんいて、そこはまさに地獄。それでも進まなければいけなかったそうです。僕はそんな世界が想像できず、とても怖くなりました。

8月15日に戦争は終わりましたが、安心はできませんでした。原爆の放射能の影響が始め、いろいろな症状が出て亡くなる人があとをたちませんでした。篠田さんの家族も放射能の

影響で亡くなったそうです。戦争の影響により、弟もわずか2歳で亡くなってしまったそうです。

僕はこの話を聞いたとき、こんなことを体験した人が何百万人もいることが信じられませんでした。篠田さんは、90歳になった今も、戦争の怖さを多くの人に伝えたいとおっしゃっていました。僕もこのお話を一人でも多くの人に伝えていくことが大事なのだと思います。

2日目には、袋町小学校平和資料館というところに行きました。そこでは、戦時中に、家族に向けて階段にメッセージを残した多くの文がありました。戦時中に家族とはぐれて、そのまま会えなくなってしまうこともあったりして、ものすごく過酷な状況だったということを知りました。原爆の爆風を受けたものもあり、ドアやガラスなど吹き飛んでいたり、ほとんどのものが一瞬にして壊れてしまう光景が目に見えました。

またそこには、外国の化学者などが日本に薬を送ってくれたことも書いてありました。外国と戦争をしても、外国の人の中にも日本を助けてくれた優しい人もいたのだと思いました。

2日間広島を訪れて、いろいろなものを見たり、話を聞いたりして、今の当たり前の生活が、どれだけありがたいことなのか、あらためて感じました。そして、実際に戦争を体験した人が少なくなっている中で、僕らが見た事、感じたことを、いろいろな人に伝えていくことが大事なのだと思います。

貴重な体験ができて良かったです。

戦争と核のない世界へ

梓川中学校2年

佐原 咲良

私が広島を訪れて最初に見たものは、賑やかで活気のある美しい街並みでした。しかし、77年前の8月6日朝8時15分広島に投下された、たった一つの原子爆弾により広島町は一瞬にして破壊されました。そして爆弾がさく裂した付近は4,000度にもなった熱線、建物を押しつぶすほどの爆風、人体に悪影響を及ぼす放射線、これらにより広島では33万人もの人達が亡くなりました。特に放射線の影響は年月が経っても続き、今もなお苦しんでいる人がいます。

今回の事業に参加して1日目、私は最初に平和記念公園に行きました。公園内を見て回り、私が特に印象に残ったのは「原爆ドーム」です。周りの景色とは全く違うボロボロで悲惨な姿でした。まるでそこだけ77年前のあの日のまま時間が止まってしまった様でした。あの日見える限りの景色が同じ様になってしまったと思うと、とても恐ろしく感じました。

その後平和記念資料館を見学しました。資料館に展示されていたのは、びりびりに破れた衣服や、爆風と熱線により折れ曲がった鉄骨、また被爆した人達の写真や絵の数々でした。被爆した方の写真には体が黒焦げになっていたり、一部が無くなっていたり、中にはご遺体の写真など目を背けたくなるようなものもありました。それらの一つ一つが原爆というものの残酷

さを物語っていました。私はもし自分がこの状況の中にいたとしたら、と考ただけでも恐怖で押しつぶされそうでした。

また、被爆体験継承者の坂本敦子さんから、被爆体験者の篠田恵さんのお話を聞きました。篠田さんは当時13歳の商業学校の2年生で、毎日建物疎開という作業に出ていました。ですが6日の朝は作業に行かずに家にいたそうです。そして原爆が投下された瞬間家の中に炎が入ってきて障子が燃え、天井から色々なものが降ってきたそうです。でも、篠田さんは大きな傷を負ったりすることは無かったそうです。しかし、篠田さんがその後広島で目にしたのは「生き地獄」だったそうです。町は一面焼け野原になり、会った人達は男性か女性か分からないほど黒く、皮膚が垂れ下がっていたそうです。その中には、「水をちょうだい。」とすがる人や、ずっと母や子供の名前を呼び続ける人もいたそうです。また、その後も原爆は人々を苦しませました。放射線による白血病などのがんになって亡くなる人や、被爆者だからということも理由に差別や偏見を受け、思うように生きられない人もいたそうです。坂本さんから聞いた篠田さんの話からその時の人々の気持ちをよく知ることができました。現代はテレビやスマホなどで簡単に調べることもできますが、実際に体験した方の話を直接聞くということ

より戦争の恐ろしさや当時の人々のつらさを身近に感じることができました。

2日目は平和記念式典を見ました。式典では岸田首相をはじめたくさんの方々が式に参列し平和の大切さについて話していました。その中で特に印象に残ったのは小学生の言葉です。

「本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとすることです。本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。」そのような思いが世界の人々にあれば戦争は起こらず、原爆も落ちなかったかもしれません。

戦後77年が過ぎ、戦争を体験した方々の平均年齢は84歳となって、人数も少なくなっています。もう少し時間が経てば戦争というものの恐ろしさを知る人がいなくなり、平和への意識がうすくなるかもしれません。そうなったらまた戦争が起こってしまうかもしれません。今現在もロシアによるウクライナ侵攻をはじめ、戦争をしている国々や核を所有する国々があります。もうこんな悲惨な出来事を二度と起こさないために、私達はただ話を聞いて終わりにするのではなく、少しずつでも平和な世界にするために色々な人に平和や戦争のことを伝えていくべきだと感じました。

過去から未来へ

波田中学校2年

石川 芽依

8月5日、私は初めて広島を訪れました。広島駅を出た後、広島平和記念公園へ向かいました。道中、バスから人々が行き交う姿を見て、「本当にこの場所に原爆が投下されたのか」と思ってしまうくらい、広島は街は活気づいていました。

公園には「原爆の子の像」がありました。像は佐々木禎子さんという白血病で亡くなられた方がモチーフになっているのだと、ガイドさんから教えてもらいました。禎子さんは2歳で被爆し、10年後に原爆症（白血病）が発症しました。原爆症とは、原爆による熱線・爆風・放射線が人体に与えた障害全てのことを指し、白血病もその一種でした。日赤病院に入院していた禎子さんの元に手紙が届き、中にはセロハンで作った小さな折り鶴が入っていました。それを見て、「鶴を千羽折れば、きっと病気は治る！」と思い、新聞や薬袋などで鶴を折り始めました。しかし、禎子さんは12歳の人生を終えてしまいました。禎子さんの級友が、「小さくてもいいから、お墓を建てよう。」と話し合ったのがきっかけとなり像が建設されたのです。各地からたくさんの募金が寄せられたそうです。この話を聞いた時、悲しくなりました。戦争がなく今のような時代であれば、禎子さんや大勢の命が奪われることはなかったからです。

その後、平和記念資料館見学、被爆体験伝承講話をお聞きしました。それら全てが戦争は虚しく無意味だということ、決して繰り返してはいけない大きな過ちだと私達に教えてくれました。過去は変えられないけど、未来は自分の手で作り、切り開いていけるから道を踏みはずすことのないように皆で支え合って生きていきたいと強く思いました。

戦争の時に一面焼け野原になった場所は今、緑で溢れ返っています。原爆が投下され、放射線を含んで降り注いだ黒い雨は今、綺麗な水となり私達の一部となっています。学校に行き勉強できること、友達に会えること、家族と一緒に笑い合えること、生きていること。そんな日々の生活の、当たり前ではない当たり前を大切にしようと思いました。

私は、広島で学んだ戦争の悲惨さ、命の尊さを皆に伝えていきたい。それが、明日の平和をつくる一歩となるから。

平和をつなげていくために

鉢盛中学校2年

石丸 心愛

はじめに、これから先、原子爆弾が日本を含め、他の国にも落とされなことを心から願っています。その上で、もっと多くの人にも同じ考えをもってほしいと思い、私が一番心に残っていることを伝えようと思います。

私はこの学習をするまで原爆のことどころか、戦争のことすらもよく知りませんでした。そんな中で聞いた、被爆された方の話は本当に怖いものでした。被爆地から2キロ以上離れた場所でも家屋が無くなるほどの火力があったこと、誰かも分からなくなるほどのひどい火傷やケガをした人がいたこと、自分が大火傷をしながらも子どもの手を引いて歩く母親のことなど、聞いているだけで鳥肌が立つような内容ばかりでした。お話をされた方のお姉さんは、実際に原爆に巻き込まれ、二度と会えなかったそうです。たった一つの原爆で同じように家族や友だちを失った人たちも多かったことでしょう。何十人、何百人、何千人、何万人の人たちが大切な人を失ったのか、私には想像もつきません。原爆の後、何とか生き残った人の中にも、放射線を浴びたことにより病気になってしまったり、妊娠中に放射線を浴びたことで胎児に影響が出てしまったりする人もたくさんいたそうです。

今回、私たちに話をしてくれた方は、原爆の恐ろしさや、大切な人を失った悲しさを伝える

とともに、「このことを一人でも多くの人に伝えてほしい。そしてもう二度と原爆や戦争で誰かが亡くなってしまうところを見たくない。」とおっしゃっていました。自分自身の悲惨な体験を隠すことなく様々な人に伝え、平和を心から願っている姿に感動しました。

私は今回のような話を聞いただけでも、かなりのショックを受けてしまいましたが、被爆された方がおっしゃっていたように、私自身も聞いたことや見たこと、感じたことを多くの人に伝え、また平和を願って生活することで、少しでも世界中から戦争などの争いごとが無くなればいいと感じました。だから私は今回、被爆された方から聞いた話を絶対忘れないでいようと思います。そして私が大人になった時に、自分より下の世代に伝え、さらにその下の世代へと語り継いでほしいと願っています。

このように過去の悲惨な歴史をずっと語り継いでいくことで、原爆の恐ろしさや戦争の愚かさがこれから先も伝わっていくとよいと思います。このことが今の私にできる最大のことだと思うし、被爆された方の願いでもあると思います。だから私は今回の広島への訪問を通して学んだことを未来へと受け継ぎ、平和な世界をずっとつなげていきたいと思っています。

ヒロシマに行って

信大附属松本中学校2年

望月 美里

昨年、私の祖母が亡くなりました。読書家の祖母が常にそばに置いた本が「きけわだつみのこえ」 — 特攻隊などで亡くなった、学徒兵の遺書を集めた本 — でした。祖母の兄は、特攻隊で終戦を迎えたそうです。もしも終戦があと数日遅れていたなら、生きて終戦は迎えられなかったといえます。祖母にとって、戦争は身近な出来事だったのです。「きけわだつみのこえ」は、祖母にとっては兄がたどったかもしれない運命を生き残った人たちの、心の叫びに思えたのでしょうか。

本を読んで、死を覚悟したはずの「兵士」と言われた人たちでさえ、戦争に対していろいろな思いを抱えていたことを知りました。では、一般の、どこにでもいる人たちが犠牲となった原爆とは、辛くも生き残った人たちは、どのような思いを抱いて終戦後を生きたのだろうか。私は実際に広島に立って確認したい、知りたいとの思いから、広島平和学習に立候補しました。

広島市に着いたとき、こんなに笑顔のあふれる街がかつて壊滅状態になったとは思えませんでした。

77年前、広島市に落とされた原子爆弾「リトルボーイ」は、12月末までだけで約14万人の命を奪い去りました。

たった一発で、14万人の命を奪い去る

兵器。その事実は理解できても、14万人という数字はうまく想像できませんでした。

原爆資料館へ行きました。原爆資料館の中は淡々と物が並んでいて、かえってそれが不気味でした。高熱によって溶けてくっついたガラス、ぼろぼろになった小さい服、被爆者による絵画などを見ているうちに、一瞬にして消えた人も、苦しんだ挙句に亡くなった人もいたと。

14万人という数字ではなく、一人一人の命が失われた事実があったと、少しずつ胸に迫ってきました。

そこで一番印象に残った展示物が被爆した小さな三輪車です。小さな三輪車で遊ぶ、小さな子供の命すら奪う「原爆」。そこに、日常はあったのです。無条件に続くはずだった未来は、その日、断ち切られたのだと。この三輪車で遊んでいた子供は、生きていれば祖母と同年代で、きっと子供がいて孫がいて、続くはずだった未来が原爆のさく裂した瞬間に断ち切られてしまったのだと、唐突に理解しました。

77年前のあの日、おだやかに続くはずだった日常。それが一瞬にして壊され、家族も友達も愛する人も死んでしまい、自分だけが生き残ったという人たちは、どれほどつらかったのでしょうか。そしてどのような思いで、ヒロシマの地を復興したのでしょうか。

原爆は、亡くなった14万人の外側の、数字

で表せないもっともっと大勢の人たちの運命すら巻き込んだのです。どれほど多くの人たちが、日常を断ち切られ、どれほど歯を食いしばって再び立ち上がったのでしょうか。

私は実際に「戦争」というものを知りません。しかし、今回、ヒロシマの地に足を運び、復興した街と展示物を目にして強く感じるがありました。戦争の悲惨さも、原爆の脅威も、実際に体験した人からすると、一割すら想像できていないのかもしれませんが。しかし、77年前に何があったのか、当時の人たちの思いを想像することや、戦争は何も生まないことを未来へ伝えることができます。

戦争の無い世の中に、どんな立場の人同士でも、殺しあうことの無い世の中にしなくてはならないと感じました。実現するのはとても難しいことだと思いますが、私たちがつかみ取らなければならない未来は、そこにこそあると強く思います。

今を生きる私たちだけが、広島にある「平和の灯」を消すことができるのです。

平和のため

松本秀峰中等教育学校2年

松本 葉里

私は8月5日、6日に広島に初めて行きました。「リトルボーイ」と呼ばれる一発の原子爆弾によって焼け野原になった日から77年経った広島は木々が生え、ビルが並ぶ綺麗な町でした。

広島に着き、最初に行った原爆ドームでは、漫画や写真でしか見たことがなく、正直あまり信じられていなかった原爆が実際にあったことだと思い知らされました。広島平和記念資料館では、こげた衣服やまがった鉄骨、溶けた仏像などを見ました。その中に「人影の石」というものがありました。それは、ある銀行の階段に座っていた人がそのまま被爆し、座っていた所だけ影のように黒く焼け残ったものでした。座っていた人は一瞬で飛ばされてしまったため、誰の影かわからないと解説に書いてあり、胸が痛くなりました。また、原爆投下前の産業奨励館と現在の原爆ドームを模型で見て、改めて原爆の威力と悲惨さを痛感しました。そして、私たちは被爆体験伝承者の坂本さんからしのだめぐみさんのお話を聞くことができました。しのださんは13歳で被爆しました。母と弟と一緒に家で被爆し、しのださんだけが軽傷で済んだそうです。その時見た広島の人々は、衣服とは言えないものを身に付けていたり、上半身はだかで歩いていたり、死んだ子供を抱いていたり、爆心地から6キロメートル離れて

いても地獄の光景が広がっていました。しのださんは原爆によって姉と兄、弟を亡くします。その後高校の恩師、すずこさんと再会します。すずこさんは「憎しみの心の中から幸せは生まれない」と言い、各地で戦争について人々に伝えている人でした。すずこさんに勧められ、しのださんも70歳の時膵臓癌の手術を受けてから、命のことや戦争について人々に伝え始めました。今の私たちと同じ年齢の時、原爆を受け、家族を亡くし、多くの苦勞があったはずで、すずこさんの言葉を受け、原爆を憎むよりも、後世に伝え、未来を幸せにしようと考え、伝え続けてくださったのがとてもありがたく素晴らしい方だと思いました。

終戦から77年間、今、「平和」な日々が送られているのは終戦までの77年間で多くの人の犠牲を出し、世界が戦争について学び、平和について考えたからだと思います。世界にはまだ核兵器があります。それはいつ戦争が起こるかわかりません。自国を守ることは必要であっても攻撃することは誰のためにもならないと思います。これからの時代を戦争の時代にしてはいけません。いろいろな人の声に耳を傾け、過ちを繰り返さないように、戦争についてもっと調べ、学び、「平和」のため活動していきたいです。

写真記録

1 8月5日(金)

平和記念公園見学(原爆ドーム・原爆死没者慰霊碑)



平和記念資料館見学



折鶴献呈



被爆体験伝承者講話



2 8月6日(土)

広島平和記念式典(座席制限につきライブ配信を視聴)



袋町小学校平和資料館



平和への誓い

あなたにとって、大切な人は誰ですか。
家族、友だち、先生。
私たちには、大切な人がたくさんいます。
大切な人と一緒に過ごす。笑い合う。
そんな当たり前の日常はとても幸せです。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。
道に転がる死体。
死体で埋め尽くされた川。
「水をくれ。」「水をください。」という声。
大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来が突然奪われました。

あれから77年経ちました。
今この瞬間も、日常を奪われている人たちが世界にはいます。
戦争は、昔のことではないのです。

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、それは、強さとは言えません。
本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、思いやりの心を持ち、相手を理解しようとする事です。
本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずですよ。

過去に起こったことを変えることはできません。
しかし、未来は創ることができます。
悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。
被爆者の声を聞き、思いを想像すること。
その思いをたくさんの人に伝えること。
そして、自分も周りの人も大切に、互いに助け合うこと。
世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います。

令和4年8月6日

こども代表 広島市立幟町小学校 6年 バルバラ・アレックス
広島市立中島小学校 6年 山崎 鈴

平和宣言

母は私の憧れで、優しく大切に育ててくれました。そう語る、当時、16歳の女性は、母の心尽くしのお弁当を持って家を出たあの日の朝が、最後の別れになるとは、思いもしませんでした。77年前の夏、何の前触れもなく、人類に向けて初めての核兵器が投下され、炸裂したのがあの日の朝です。広島駅付近にいた女性は、凄まじい光と共にドーンという爆風に背中から吹き飛ばされ意識を失いました。意識が戻り、まだ火がくすぶる市内を母を捜してさまよい歩く中で目にしたのは、真っ黒に焦げたおびただしい数の遺体。その中には、立ったままで牛の首にしがみついた黒焦げになった遺体や、潮の満ち引きでぷかぷか移動しながら浮いている遺体もあり、あの日の朝に日常が一変した光景を地獄絵図だったと振り返ります。

ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、1945年8月6日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにしなくてはなりません。

また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。

今年初めに、核兵器保有5か国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」「NPT（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしなければ、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょう。今、核保有国がとるべき行動は、核兵器のない世界を夢物語にすることなく、その実現に向け、国家間に信頼の橋を架け、一步を踏み出すことであるはずで、核保有国の為政者は、こうした行動を決意するためにも、是非とも被爆地を訪れ、核兵器を使用した際の結末を直視すべきです。そして、国民の生命と財産を守るためには、核兵器を無くすこと以外に根本的な解決策は見いだせないことを確信していただきたい。とりわけ、来年、ここ広島で開催されるG7サミットに出席する為政者には、このことを強く期待します。

広島は、被爆者の平和への願いを原点に、また、核兵器廃絶に生涯を捧げられた坪井直氏の「ネバーギブアップ」の精神を受け継ぎ、核兵器廃絶の道のりがどんなに険しいとしても、その実現を目指し続けます。

世界で8,200の平和都市のネットワークへと発展した平和首長会議は、今年、第10回総会を広島で開催します。総会では、市民一人一人が「幸せに暮らすためには、戦争や武力紛争がなく、また、生命を危険にさらす社会的な差別がないことが大切である」という思いを共有する市民社会の実現を目指します。その上で、平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する「平和文化」を振興します。平和首長会議は、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指すことを後押しします。

今年6月に開催された核兵器禁止条約の第1回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約がNPTに貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずはNPT再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。

また、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆77周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

令和4年8月6日

広島市長 松井 一實

旅の日程

	時 間	項 目	備 考
8 月 5 日 (金)	7:40	松本駅駅前広場ウッドデッキへ集合	受付
	7:55	出発式	
	8:36~10:52	松本駅 ⇒ 名古屋駅	しなの4号
	11:32~13:48	名古屋駅 ⇒ 広島駅	のぞみ85号 (車内で昼食)
	13:48~14:20	広島駅 ⇒ 広島平和記念公園へ	貸切バス
	14:20~16:00	原爆ドーム、平和記念資料館見学	徒歩 (折鶴献呈)
	16:00~16:15	広島平和記念公園 ⇒ RCC文化センターへ	貸切バス
	16:15~17:15	被爆体験伝承講話	
	17:15~18:00	ホテルへ移動	貸切バス
	18:00頃	安芸グランドホテル着	
	18:30~	夕食 (安芸グランドホテル)	
6 日 (土)	7:00~	朝食 (安芸グランドホテル)	
	8:00~8:50	平和記念式典ライブ配信視聴 (ホテル内会場)	
	9:30~10:10	広島市内へ移動	貸切バス
	10:10~10:45	袋町小学校平和資料館見学	
	11:00~12:22	広島駅 (お土産)	
	12:22~14:34	広島駅 ⇒ 名古屋駅	のぞみ24号 (車内で昼食)
	15:00~17:04	名古屋駅 ⇒ 松本駅	しなの17号
17:15	解散式 (松本駅アルプス口)		

参加者一覧

参加生徒

学 校 名	氏 名
清水中学校	松並 優奈
鎌田中学校	倉田 千義
丸ノ内中学校	柿澤 由那
旭町中学校	岩波 理咲
松島中学校	深澤 悠貴
高綱中学校	小山 舞
菅野中学校	武本 直樹
筑摩野中学校	草間 希泉
山辺中学校	嘉納 奏一朗
開成中学校	浅尾 夕棗
女鳥羽中学校	三枝 悠歌
明善中学校	環 心
信明中学校	深澤 愛華
会田中学校	召田 蓮真
梓川中学校	佐原 咲良
波田中学校	石川 芽依
鉢盛中学校	石丸 心愛
信大付属松本中学校	望月 美重
松本秀峰中等教育学校	松本 葉里

事務局

所 属	役 職 等	氏 名
波田中学校	教 諭	中村 芳晃
鉢盛中学校	教 諭	関 陽子
平和推進課	主 事	小沢 智也

平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の願いである。

われわれは、平和を愛するすべての人々とともに、
核兵器の廃絶と戦争のない明るい住みよいあすの郷土
を願い、ここに「平和都市」の宣言をする。

昭和61年9月25日

宣言の趣旨は、平和の確保・核兵器の廃絶を願いとしています。

私たち松本市の「平和都市宣言」が力強い宣言となるよう、暮らしに根ざして、
平和の願いを大きく、根強く、たくましく育て続けていくことが大切です。

ひろしま レポート

第32回広島平和記念式典参加事業

2022.11

編集発行：松本市 総務部 平和推進課



松本市役所前庭に設置されている「平和の^{ともしび}灯」

松本市では、松本市平和都市宣言の理念に基づき、一人ひとりが命を大切にし、永久に平和であることを願い、平和を創る取り組みを広げるため、「平和の灯」を灯しました。

この灯が市民の平和のシンボルとなり、多くの皆さんが命の大切さや平和の尊さを考え、平和の連鎖がより一層広がっていくことを願っています。

